

律動遊戯の補遺

土 川 五 郎

律動遊戯が幸に小學校や幼稚園の皆様の御情によつて子供に與へらるゝこと殆ど全國に亙る様になりました、各地で講習を致しました經驗から考へて見ますと、あの二冊の本にある動作の説明はあまりに簡單であつて誤り易い點があり、さなくとも私の作りました意味が徹底し得ない憾がありますから、茲に保姆の方が幼兒の前になさる用意の爲め又小學校上級に對し藝術の深みを味はしむる爲めに茲に繼續して掲ぐることに致しました。

一、かいぐり

- (イ) 兩拳の握り方 四指を握り其上に拇指を斜めに重ねる
- (ロ) 始めは堅く握らしめて柔らかに回さしむ
- (ハ) 胸前へ持ち來れる時手頸を稍々手前に屈して回さしむ
- (ニ) 肱を後ろに引く時幼兒はやゝもすると兩手を伸ばし下ぐることがある、これでは胸筋を引く

二、おじき

- (イ) 手の拍ち方 自然の位置に打つ、殊更に胸に近く持ち來りて打つ如きは不自然である、即ち兩手を兩側に下げそれより最も近き道を取りて體前に打ち合ふ、指先きは斜下に向ふ、これが自然に近いと思ふ
- (ロ) 拍手二回の後兩手を兩側に開く時上體を斜左又は斜右になげる、兩側に開かずして膝の所に作用を没却して意味を失ふことになるから、肱を屈したまゝ後ろに引くことに注意せねばならぬ
- (ホ) 兩拳を體前にて打つこと三回此の時頭を左に傾け少しく前にして打つ
- (ヘ) 兩拳の回轉 一小節に二回の間を取ること、此の間の取り方は我國民の拍子の取り方で、西洋の間マツの取り方と異なる所です、快感の度も自ら異つて居ります

兩手を置いたり、腰を屈したりするは誤りである

(ハ) 右回轉の時はつまさきにて跳躍の如く子供らしき回り方を取るべし、片足の踵でくるりと回る様なことはせぬ様に

三、はたおり

(イ) 第一に腕を充分前に伸ばし拇指と四指と相對し堅く物を挟みたる如くして手頸を屈して指を下にさぐ、引く時強くして出す時は反動にて充分に伸ばす

(ロ) 二回此の如くして後三回は極めて少さく

(ハ) 兩手を體前にて交叉する時手頸を少しく屈し其運動は腕を時計のフンドーのゆるる如き心持ちにてなす

(ニ) 兩手を胸前に持ち來り物をつまみたる如くして左右に開く時、ごむを引き伸ばす如く、ジリと力強く左右に開きたる時に全く手頸を外後方に反し再び胸前に反す時次第に手頸を外方に取る

開きたる時肩胛骨の合する迄

(ホ) 右回轉の前に曲第二段第二節の終りの高さ

つの音(ソノ音)の時右腕を少しくあげて其足より右に回り始む

四、月

(イ) 足の練習 遊戯を教ふるには教授の方法順序がある、これが正しく行はるれば氣持ちよく容易く遊戯中の人となれるのです、先づ左足を一步左へ膝をかゝめ右足を左足につくる時に踵をあげて伸びて後下ろす次に右へ同じ運動をなす、これが出來得てから左一步の時顔を左上に向け左肩を少しくあげ踵を下ろす時常位に復す右一步の時同じくす、これがすなほに出來てから左手をあげ又は右手をあげる、これにて第二段を完了するのである

(ロ) 第三、四段 これも足の練習が先きである左足を摺りて一步前に此の時膝を屈し右足を前につくる時伸びて後踵をつく、右足と交互に前進の練習をなす、次に右足より後退する時同じ要領である

手の練習 兩手を左右に開く(自然の形に)時可成後方より頭上へ運ぶこと大切なり而して止まる事なしに前より下へおろす、兩掌を向き合せ

(弧形に)五寸位の距離に對立せしめ、其距離を保ちつゝ體前下方へおろし兩手の伸びたる時更に左右に開く、此の時に手の上方へ行きたる場合に顔を其方へ向く

手と足の別々の練習が出来た後に合せて行ふ

(ハ)影を寫す時あまりに頭を前に下げず寧ろ上體を左に傾くる時頭もやゝ左に自然のまゝたるを要す

(ニ)最後の「ロ」の段 兩隣りのものと手を持ちたる如き姿勢を個別に取らしめ膝の屈伸と共に手を上下する事の練習を先きになす、手の上下の場合には下ろす時力強く上ぐる時極めて軽くせしむるを要す

次に足の練習即ち左又は右横足の練習をなす、此の時左又は右へ一步ふみ出す前に第一に踵を浮かしめること、第二につまさきを軽く使ふこと、第三に膝の屈伸を行ふこと第四に上體を稍々右方(左行の場合)又は左方(右行の場合)に傾く此の練習の出來たる後手をつなぎて行ふ

(ホ)曲第四段の前進する時手と上體は可成深く下へ順序にあけて最後に頭と同じ高さ(決して手

を上へ充分に伸ばすことなく)にあげ顔もやゝ上方を向く

(ハ)右回轉をなす場合左足を一步右足の右へ運ぶ時膝をかゝむ(あまり上體を前に屈する事なく)次の一步にて伸ぶ

五、 凧

(イ)曲第一、二段 踵のみにて足拍子を取ることを教へ、次に「たぐる」ことに移る、たぐる場合に上體は正しく前方に向ひ決して右又は左に向かしめぬ様に注意せねばならぬ、即ち右たぐり場合には上體を少しく右に傾け顔は右上に向へ右手は充分に斜右上方に伸ばし左手は上體の正面に向きて行ひ得る程度に於て右斜上方に伸ばし雙手にて交互に大きくたぐる、左たぐりの場合亦同じ

(ロ)曲第三、四段 凧糸を強く引く場合左又は右へ雙手を充分に揚ぐること及び上體は正面に向へおくこと、左又右下へひく時左又は右側にてしつかりと止めて餘勢を残すことに注意すべく右方(左方)に足を運ぶ時右足を一步次に左足を右足の右へ次右足を左足の右へ次に其まゝ左足

尖を左方へ向く、此の時の歩法は左又は右方へ側進するので前進するのではない、尙初めて二回叩く時はつま先にてなし、それより軽くたぐりつゝ、右側又は左側進を(前に述べたる如く)なす

(六) 曲第五、六段 三歩目に兩手を開く時兩足の踵を充分に上げ頭は出したる足の方向下にさぐ、而して兩手を開く時じり〜と力強く柔かに側方にあぐ

(三) 第二回目の曲第一、二段 右向行進兩手を側方に開きたる場合充分に兩手を後ろに胸を出すことに注意を要す

第三、に移る時急に左横足に變ずる所に氣持よき所あり、急速の變化を心持ちとすべく、膝の屈伸に注意すべし

終りの兩手を左右に開き膝の屈伸を行ふとき膝の屈したる時手を下に而して手をそらせる様に力を入れ膝の伸びたる時に軽く手をゆるめる、四段も同じ要領である

(ホ) だるま風にて跳躍する場合兩手は下より軽く組み胸部に影響の少なからしめんことを要す、

頭は跳ぶ足の方へ傾く

○射鏑馬を見ても

十月二十八日明治神宮外苑で二日に行はれる對鏑馬の稽古の拜見を許されて出かけました日本歴史で教へる時もヤブサメと云ふ讀み方の難しさに囚へられて頭の悪い生徒は「人の名」ですと書くものもないではありませぬ故實を目的あたり見る嬉しさに今や遅しと待つてゐると何坪か繞らされた楕圓形の馬場の柵の右手の射鏑(太鼓をうつ所)から紅の裝束つけた人が合圖の太鼓を鳴らすと左手の端から八騎の射手が各、前に三名の耶黨に角の木の的を持たせ裝束つけた的奉行を引連れ馬のくつわを下郎に取らせて狩衣姿で指貫の袴をばき馬上豊かに弓矢を携へて乗り出して來ました一順すると一度たまりに控えて先頭の一人は衣冠をつけた神主めいた人と馬場の中央で挨拶をし全體馬場を退きますその中愈々なる一聲の太鼓で出るよと思ふ間もなくはやる馬と共に勢ひ込んだ「イヨウアラ〜」のかけ聲勇しく黒白の幔幕張つた的場の前にたてられた白木の的をはつと射る拍子にパツと真中から二つに割れてとびますそのまゝ馬はかけつて乗手は腰より二の矢をとつて番へ第二の的場で又も射第三の的場で射て馬場の後へ退いて行きますひつそり靜つた見物人の前で暗の離れ業その昔屋島の戦に花を欺く平家の官女の扇を一矢で射おとした那須の興市の悌は見る由もありませぬが夕陽に輝く赤青の錦の衣風をきる矢の音馬の勢は暗れがましく又壯快の極みてした、恐らく頼朝の時分もさうでせうが近代人の射手は見物人の前でかなりなくれたとる人もありましたこれは又一つに馬にも弓にも昔程親しみの少い生活のせいでせう

(らく子)